

# Traveling Research Laboratory

Research  
2016.12.05 - 12.16

Report Session  
2017.02.05

プロジェクト3年目となる2016年度の旅の地は小笠原諸島。リサーチ旅のキーワードは「Nodus(ノドス)」。 「Nodus」とは、「接点、結び目、もつれ、難しい局面」など複層的な意味を含むラテン語。独自のクレオールの多様性、「Nodus」を含んだ小笠原にて、ゲストディレクターやゲストリサーチャーをメンバーに迎え、複数のリサーチャーによる視点と考察の違い、それらが接触・交換する時に生まれる化学反応を観察・記録することに取り組みました。旅後には今回試みた「全記録」、「グループ型フィールドノート」の要素を織り込んだ報告会ライブを行い、最終成果物としては旅のエッセンスを纏った11枚のポストカードと地図ポスターをセットにし同封しました。地図の裏面には、3年目の活動内容だけでなく、これまでの3年間の活動を振り返った対談形式のテキストを記しました。

旅するリサーチ・ラボラトリー 企画・監修 mamoru、下道基行

【小笠原諸島】は東京から南に約1000km、父島列島、母島列島、硫黄列島などの島々からなる。火山活動によって生まれた島々は大陸と陸続きになったことがない【海洋島】。独自の生態系には【固有種】が多数存在。島の大部分は国立公園であり、また2011年には【世界自然遺産】に指定された。紺碧の海は【ボニン・ブルー】と呼ばれ【イルカ】、【クジラ】、【ウミガメ】を見ることができ。島へのアクセスは東京・竹芝港から6日に1便の定期船【おがさわら丸】にのり【24時間】。父島から母島へは【ははじま丸】にて2時間半。「小笠原」の名の由来は、信州松本城主【小笠原貞頼】がこれらの島々を発見した、という伝承による。この人物の存在に關し諸説あるものの、江戸幕府は漂着民からの情報をもとに調査隊(1675)を派遣し島々を確認していた。当時の地図には【無人島】と書かれており、定住者はおらず、【無人】という言葉から英語名【BONIN ISLANDS】が生まれたとされる。19世紀、小笠原近海で【捕鯨】が盛んになり、燃料などの補給のために住み着いた米国人、英国人、ハワイ人数名が最初の定住者とされる。他にもロシア船が出入りし、英国は1827年に領有宣言を行った。1853年には【ペリー】が父島・二見湾(ポトロイド)に寄港し、港の最も良好な土地を燃料補給地として購入。こういった諸外国の動きに対し、江戸幕府は【威福丸】を派遣、和名の地名、島名を付した地図を作成し、八丈島から移民団を送り込み領有を試みた。明治になり、政府は小笠原諸島の【領有宣言】(1876)を行い正式に領土とした。定住していた米・英・ハワイ系の住民の帰化が進められた。その後、これらの人達は子孫を含め【欧米系島民】と呼ばれるようになった。島々では日本語教育、殖産興業が進められ、八丈島、沖繩、本土からの【開拓移民】が増え人口は7000人を数えた。日米開戦後、南方と本土の情報中継点であった小笠原諸島は攻撃の標的になり、1944年に島民は内地へ【強制疎開】させられ、硫黄島を含む島々は要塞と化す。戦後は米軍による【古領体制】のもと欧米系島民のみの父島母島が認められた。強制疎開から25年、1968年に小笠原は日本に【返還】され、各地に転居していた【旧島民】の一部が帰島、再ジャングル化した島の再開拓が始まる。現在の人口は約2500人だが、戦後新たに移住した【新島民】、固有種やその生態系を研究する生物学者、歴史、文化、政治、言語、宇宙研究、農業研究に携わる研究者達など多種多様な人達が訪れ、暮らす。

【小笠原リサーチメンバー】  
リサーチャー：mamoru(サウンドアーティスト)、下道基行(美術作家/写真家)、EAT&ART TARO(アーティスト)  
ディレクター：森司(Tokyo Art Research Lab ディレクター)  
記録：川瀬一絵(写真家)  
コーディネーター：浅井聖

0 250km 500km

1,000km

## BONIN ISLANDS

弟島  
兄島  
父島  
小笠原諸島  
母島  
姉島  
妹島

0 10km 20km

—————
以下の文章は「旅するリサーチ・ラボラトリー III」の報告会を経て、本成果物を作成するにあたり、そのメインテキストを作成するために2017年2月10〜13日にかけてmamoruと下道基行の間で行われた会話の録音セッションを元編集されたテキストです。

—————

mamoru(m)：今日は3年目のメインテキスト作成セッションとして下道さんと2人でPodcast録音をSkype経由でやってみようと思っています。

**下道基行**(S)：はい、報告会ライブからもう1週間です。旅するリサーチ・ラボラトリー(以下：TRラボ)が3年目。今回は小笠原諸島に行きました。その成果物としては報告会ライブとポストカード11枚から有程度集約される予定です。3年目ともなると旅が得たものを形にする色々な方法のコツを得てきているか、という気がします。毎年、新しい報告会や報告書の形を話し合いながら作ってきましたが、1年目、2年目、そして3年目を通して見えることや、今後のことも少し考えてみたいと思うんだけど、どうだろう？

m：良いね。この3年間の濃密な経験を経てTRラボ独自の方法や技術、道具なんかも少しづつ増ってきたし、「旅するリサーチ・ラボラリーの解説書」のようなテキストを作るには良いタイミングかもしれない。これまであまり話したり、書いたりしてこなかった辺りを中心に話してみようか。

S：ではまず、何故このTRラボをスタートすることになったのか、というのが、実際のこのプロジェクトは見えにくいよ。というモチベーションとか、どういう意味があるのか、その辺りをもう一回整理できると良いと思うので、まずはじまった経緯から。

—————
**【旅するリサーチラボラトリーって何？】**

m：具体的な経緯としては、何かリサーチに関連した仕事を一緒にしませんか、というでもオープンなお話いがアーツカウンシル東京(当時東京文化発信プロジェクト)の森司さんからあって、その頃は作品をたくさん作れた時期で、オファーが来て、どこかに行って、何かを調べて、作品を作って発表するっていうことを繰り返していたんだけど、同時にそういう制作活動をもっと少し見たいと思うようになった。アーティストとしての地力をどう上げたいのかなってことを悶々と考えていた時期でもあった。そもそもアーティストであることの根幹に作品を作って発表するっていうのはあるんだけど同時に何か知らないことを知りたくて、というモチベーションもある。作り考えたり、展示して知るところはあるから、何をやっているのかははっきりとはわからないままで突き進む局面ももちろんあるけど、とにかく次々作って見せなきゃいけないっていう状況だと、さすがに消化が通いつかなくなって、ダメも効かなくなってくる。そういうフラストレーションなり、ちょっとした歪みけどんどん強くなっていったので、時間をとって自分の制作活動を見直したい、というアーティストック・リサーチという専攻でオランダの大学院に入学とって考えていた時期と重なった。

S：自分の場合は、例えば写真10枚並べて発表する。すると、写真と写真の間になんか、切断されちゃって見えなくなっちゃった過程みたいなものがある。それは抽象的で上手く働くこともあるけど、実は一番美しい部分を削ってしまったって感じとすることもあって、それによって表現できるだろうって思ってた。もちろん、そういう過程が切り落とすことで表現として面白みを増すことも多々あるんだけど、写真集の場合は最低よくある日記だったり、文庫やつて表現したりするし、写真と写真の間にあるものをどう見せるかが可能なだろうなあって、TRラボでは主にそういうリサーチから作品を作る過程でこぼれおちる何かをどう拾うのか、拾ったものを伝えるにはどういう方法があるのかっていうこと的思考と実験の繰り返しだった気がする。

m：TRラボというのは名の通り、旅をリサーチするか、旅をしなからのリサーチなのか、いろんな要素があるとは思っているんだけど、ともかく名前の通りラボラトリー、研究するっていうのが重要で、そこをアーティストとも旅を発表するという姿勢と少し分けて考えたところから始まったとこそ。こういう課題にグループアプローチという考え方とミッシャー(下道基行)に共同企画・監修者として一緒に何かできないか、と声をかけた。

S：アーティストによる研究」の姿勢にフォカスする、つてのは、TRラボのモチベーションとしてわかりやすいね。昨年から国立民族学博物館にアーティストととて客員で関わっているんだけど、研究者の方や博物館の方がアーティスト等の新しい表現やアウトプットに興味を持ってもらえることが多々あって、TRラボはその方向に行っているのかも。

m：なるほど。作品を作ることで何らかの技術みたいなものが生まれることがあるじゃない、アーティストとして自分らの技術を発見してっていう。そこにフォカスしてみる機会を作れるんじゃないかと考えたわけ。研究方向に偏ったプロジェクトが「個くらいあっても良いんじゃないかな」というか、実験の場に行きたくないかっていう思いはこのラボラトリーの始まりの、大きいところかもしれない。

S：ただなあ…、この場合、作品として完成させなくても良い、というのが、いい意味でも悪い意味でも拍子抜けしているというか…ね。こういう研究する方向に傾けていくと、アウトプットの機能を弱体化させられないし、完成しないプロジェクトの過程で本当に面白いのって思ったり疑問はあるんだけど、表現するってことが変な感でつついて、奇妙な表現が見つけられるならそれは面白そうだな。だから、たたく制作の過程を記録するってことじゃなくて、やっぱり表現者としてはどう、それを人に見せられるところまで持っていくか試行錯誤の中からどこまでそれを到達できるかってことなんだと思うけどね。

—————

S：確かに。1年目は、再現可能な台本を作り、それを報告書とするために、逆に客の前で報告ライブを行った…、と言えるよね。

m：記録と記述(同時に起こってて表現に向かうって)。2年目のリサーチトピックのひとつだった歌「鼓」(た)をとりあげたのもうひとつのことを意識しだしたんじゃないかな。東京の深川から、松尾芭蕉を旅と表現の先人として振り返り、奥の細道を意識しながら、句が読まれた場所を幾つか訪ねたりして。俳句のことは本などに何も知らなかったけど、旅の一場面とその時の心境を捉え込むことで、旅っていうライターの高いものが記述される。しかも5、7、5の17文字なり、短歌の文字数にも詩的に圧縮されているから、まるで映像ワンカットだけ、頭中で観られるようにになっている。だから記録すると同時に、後で推敲して書き直す原材料にもなっていて、最終的には旅どうこうを超えていく。

S：ちょっと脱線するけど、TRラボでひとつ気に入っている所って、もうこっぴड़かしく言えないようなことを、一からもう一回勉強し直せること。「旅だからテーマが松尾芭蕉？ペタすぎ！」と言われかねないことだけであって正面から調べてみてることの賢さ。1時間にまとまった松尾芭蕉スペシャル番組を見てわかった気にならんじゃなくて、自分達の方法で自分で感じて、知りたかった。宮本常一や小泉文夫、松浦武四郎だった、知ってる気になっていても、もう一回、TRラボの視点で勉強し直してこう、それを実験体として記録したり、インプットしてきたことも試行錯誤の一環として生きてくる。

m：もともとは脚本があってその筋道を追って行くわけでもなく、やりながら、咀嚼しながら、自分達なりに発見した方法論とか経験をフィールドワークさせながら反復して、なんとかアウトプットして開示している。ところで、TRラボとして実験していることってどういう所で役に立つのかな。もちろんまずは自分の成長のためにはやっいて、少なからずリサーチに関する考察として面白い一例にはなっているだろうなっていう感じだね。

S：地味な基礎研究みたいなことなかもかもしれないけど、たぶんこういう試行錯誤が実を結ぶことだったり誰かに届くのはすごい先になるかもしれないね。タイムカプセルみたいな。

—————
**【ライブ-ライブ-ライブ、3年目の話】**

m：ともあれ、3年目もTRラボは更なる試行錯誤を行った。特にリサーの準備、初期段階がリサーチトピック。

S：そのために、今回は移動を続けるのではなく「フィールドを限られたエリアにする」、「別の興味/方向のゲストリサーチャーと一緒に旅する」、そして2年目の移動車の「ゲストシート」アイデアの延長で「ゲストデスクター」という発想が生み出されて、TRラボの生みの親でもある森司さん逆指名した。本当はつらいというメンバー構成でのリサーチ旅をできた、と言っただけど結局は小笠原一箇所だけになったよね。

—————

S：2011年に行なわれた国立国際美術館の「風穴」展で「THE PLAY」による作品をはじめ見た時、彼らの行動の映像記録で見ているもの以上に、既に何十年も前に終わってしまったイベントの日の書かれたDMやチラシに妙な存在感や意味を感じたのね。例えば、記録される紙媒体がライブの録音や報告書であるだけじゃなくて、準備段階ですべて記録してライブに接続し、さらに終わった後にも意味を持つようなことを挑戦し続けた。残す意識と残さない意識の新しい形というか。今回TRラボとしてどうやって3年目のリサーチの重要なプロセスや発見の飛び火をどうやって印刷物に落とすんだらうか、と考えた結果、このテキストとセットになっ的に取られている11枚のポストカードの形になった。しかも、その11枚のうち一枚(カゾドリ)は実際に配布された報告会のDM。こうすることで報告会の報告書じゃなくて、決して再現はできないライブの一部、しかも実物、を封入したことになる。報告会時にはDMともう1枚のポストカード(大海原)も取りあげられて、オーディエンスに配られた。だからこの印刷物が報告会の一部でもあったことより密接になっている。

m：こうなってくると、プロジェクト全体がひとつのライブ的な時間を帯びてきているし、それは旅とかリサーのライビ性とか繋がってるとも思う。お客さんが会場に居ながらして小笠原リサーチ旅を振り返りつつ気づいたらリサー現場に居た、ということを試した部分もあったからね。

S：今回の報告会の流れを簡単におさらいしましょうか。
①挨拶。旅するリサーチ・ラボラトリーについて。
②小笠原の歴史・文化の基本的情報の紹介(パワーポイント)
③「メンバーが撮った旅の画像と音声を混ぜ合わせた全記録公開スライドショー」
④Podcast公開収録による全員でのまとめ/背景に記録者の川瀬一絵のみの写真によるスライドショー

となっていて、ライブ性が強かったのか、③と④だね。③は、今回は森さんの提案で、リサーチーム、全員がメモ代わりに携帯で写真や動画をとにかく撮るということを決めていて、大量に撮影された写真や動画を時系列に並べて、その場でスライドショーにしてみよう。携帯の

m：うん、そうだね。

—————
**【旅するリサーチの始まり -1年目の話】 ※参考資料A**

S：1年目、mamoruから相談を受けてすぐに「フィールドワークやリサーチをしないで、さらにいろんなイベントをしてくれる人達に会いに行こう!」というアイデアを出した。興味のある人の本を読んだりするのは、直接会う機会ってなかなかないし、この新しい、TRラボという「両書き」を使っていろんな人に出会いに行けるぞ!って思ってた、本当にやってみよう。例えば、アカデミックフィールドワークの人類学や民俗学の人達の研究っていうのは一体どういうことをやっているのか。この機会にフィールドワークっていう言葉自体も深く知りたいかったし、ジャンルも変われば、いろんなフィールドワークのやり方、アウトプットや表現の方法もあるだろうと。リサーチをベースに小説書いてる人もいるし、料理について調べながら旅をして最終的に店を作る人もいるし、そういう人達も「フィールドワークのようないつ」をしてるんじゃないかって想像して、会いに行ってみよう、ってのがまず1年目に立った柱ではあった。
「リサーチャーをリサーチする」とか「フィールドワークをフィールドワークする」とか言ってたね。

m：そうだね。複数のメンバー達とどういう人かに話を聴きに行くのかっていうのを考えていくことで、自分達の興味を広げようとしたし、そもそもどういこうとどこに興味があるか確認したりっていうプロセスがあった。その中で、ミッシャーが宮本常一さんのことを引き合いにだして話していたことが度々あって、こういうリサーチ旅をしながら進んでいくって改めて話せる旅を思ったりして影響を受けた人達の資料があったり、一緒に仕事を手伝った人達を訪ねることもできるんじゃないかと。それで俺は小泉文夫さんを推した。

S：そうそう。今現役でバリバリとやっている人達と、もう亡くなっている先人も組み合わせるね。小泉文夫資料室では色々貴重な資料を開けてもらって、実際に教習の方に当時の様子を教えてもらった。それだけでも特別授業を受けてような経験だった。レクチャーを受けた人も自分達で選んで会いに行ってるその授業を受けていっているのはすごいね。一人じゃできないことだしだね。もちろんそれ上手いじゃなかった場合もあるけど、「フィールドワークと表現」という言葉の対象範囲を自分達なりに限界まで幅を広げて、どこまでフィールドワークと呼べ、リサーチと呼べるのか、実際に表現と呼べるのかという問いでもあったわけだから。

m：そうだね。旅をしなから会いたい人が出てきて日程もルートも変更したりしたよね。

S：変更と言えば、当初は山口県から旅をスタートさせて東京までのルート中にくつか電車移動も含まれてたんだけど、結局何回もレンタカーを延長しなおして全行程をひとつの車の旅にした。というのが、車中でやるのインタビューするんだけど風にも話しようかとか、車内で編集作業が始まって自然とラボになっていってこの空間が一番大事じゃないかと。

S：旅の終盤は、この旅と自然という風に、報告会で伝え、報告書として何を残すか、っていうことを車中で話し合ってたよね。

S：そもそも、報告会と報告書を作るのって、初めから決まっていたのだったさ、この二つが段々の制作でいうアウトプットになる訳だから。

m：成果物を出さなきゃいけないっていうのは決まってた。さらに、チームを作る時に、割と最初の時点でデザインと一緒に行くこと、となった。旅が終わっても、言葉で伝えて、デザインしてもらっちゃなくて、リサーチの新しいプロセスそのものに付き合ってた。それら何か新しいアイデアが生まれるわけではないという興味だったよね。そういうことを面白がってくれそう人、というところでデザイン系の丸ちゃん(丸山晶磨)に声をかけた。彼は、このプロジェクトにとって重要なアイデアも設計してくれた。覚えてる「最初の企画段階だと丸ちゃん単発でインタビューに会いにいってっていうプロセスを想定してたけど、それを聞いて一人づつ人がミーティングの時に「これ一個のアイデアにした方がいいんじゃないか?」って。

S：それで短期間に全行程をひとつの旅にまとめちゃっていい大変なことが始まっていた(笑)。

m：おかげで、移動車内の空間が一番全員が顔付き合わす空間になって、そこをどう有効に使うかっていうことに工夫も試行錯誤も生まれてきて、旅前には知らなかった発見をした。

—————
**【リサーチを、どう記録するか? -1年目の話】**

S：その車中では、いろいろなものが会話の中で生まれてはきていたけど、アウトプットには結びつかないようなことばかり。でも、そういう記録に残らない会話や小さな発見、それらがお互いある瞬間に飛び出していくようなことを定着できないだろうかっていう挑戦があった。その実験のつじつまが、毎日のタイムラインに沿って毎日一枚の紙をメンバー全員で回し書きする日記。スケジュールのような時間割になっているA4の紙(横罫)を1だけ、それを一日一枚で、全行程を縦方向に敷いていて、縦線にしてね。「車内での話が面白かった」とか「あそここの風景を見てこう思った」とか、「インタビューの内容でここが面白かった」とかを、全てでひとつの日記帳に書き込んでいく。

m：全員共有のノートみたいなにして、訪問先で取り出してスタンプを押したり、夜ご飯の後や寝る前などの空いているのが使用済みのチケットやプロフィールの写真を切り取られて貼ったり、イラストを書き込んだり。

—————

画像のどのかたまりを出すかは下道が担当。その画像群の隙間に音を挟むのはmamoruが担当。結局、事前のミーティングも繰り返して、練習も重ねたけど、もう少して結構「ライビ」として良いものが成立しそうなのに比べては正直な感想だったけど。

m：うん。稽古時間はなかったかも。でもね、後で録音したものを確認して、計画してた以上のものが生まれてたのかなっていうのを感じた部分もあった。例えば④では背後でどういう画像が流れているか気にならずに喋っていたにも関わらず、流してた録音の舞台と画像に写っている風景がほぼシンクロしていた。こういう偶然は、練習を続けて、やろうとしていることの強さが顕著になり、共有できたりした時に起こる気がするんだけど、こういう瞬間にライブの強度はグンと上がる。

S：確かに。だから①、②、③とか台本がある部分はテンポよくシャープに仕上げているって、クエポイントとか重要なポイントがわかった上で話せるようになる。その上で、手直しするとういとか何をやるかわからないところは残しておく、ということなんだろうね。そう言えば1年目の報告会も結構流れや台詞を考えて構築したけど、最後にアシタエイ・リサーチャーとして参加してくれた3人にリサーチに参加した感想みたいなことを自分の言葉で書いていって書いてもらったことあったよね。あそこは話を話そうねって決めた部分じゃなかったから、言葉が生きてたんだよね。だからライブを報告会のために書き起こした時に、他は結構書き直したところが多かったんだけど、あそこはほとんど書き直さなかった。

m：そうだったね。TRラボのライブをどうやって良くしていくか、っていうことは今後の更なる課題かもね。

—————
**【空間と時間の接続方法】**

S：ライブのことももうひとつ空間に関わると、会場空間の作り方。1年目に旅の車内で話していることをそのまま報告会の会場へ持って来れないかと考えた時、車本から発表する空間の真ん中に入るぐらいのイメージでさらにその車の周りを客が囲んで聞いているってのを想像したけど、実際に車は会場に持ち込まなかった。だけどそのイメージが実はそのまま2年目の車内から発表されるライブになっているわけ。それで、3年目の話にしても、霜で毎日朝と夜に“食卓”を囲んで皆で話しかける話を記録したらどうかっていう感じは、その延長にあるか。移動する車内じゃなくなって、小さな島の民泊の動かない食卓がずっとある。食卓は色々な話を食べ物やその日のそれぞれのおもてなしの収容物が選ざり合う場所だから。メンバーがひとつの部屋の中で向かい合って話している感じだし、その周りに人が見えてるって感覚が作りたかったって思ってた。一応食卓は毎回定点で動画撮影していた。直後、報告会や報告書にも残らびついていたよね。

m：なるほど。ちょっと会場の話からはずれないかもしれないけど、移動夕食を囲みながらPodcast風に録音をやってみて、移動車と決定的違うのは時間の枠がある。移動している場合だと、次どこどこに行かなきゃいけないんであと2時間しかありません。ど強制的に終わる必要があったりする。じゃあ、その間にパッとやっちゃおう、となる。夕食を囲んだ場合っていうのはなんと今でも最後までズラズラする。これをポキャプラリーとして書いたら移動車ポラの条件としてラジアンという人が話すというひとつのギアだった。夕食を囲んでいこうだったり、外を歩きながら駆るっていうギアとかを意識すればタイムフレームのバラエティが意図的に作り出せるのかもしれない。

—————
**【全てを記録(しよう)する】**

S：おそろく4年目の大きなテーマとしてはTRラボをどうするか。3年間の実験を経て、まとめあげること。まだまだ実験的に進ませながら自立した表現として世の中に出してやるのか。キーワードとしては、「東京」、そして時期的に踏み込むと「オリンピック」。このキーワード意識を表に出さない場合はあそこ、背後で考えながら決めないかな。ただ「東京」と言っても、そのまま文字通り「東京でリサーチなのか…」、そこをひっくり返して置き換えて……例えば「ソウルで東京を考えると!」とか?

m：ほ!オリンピック開催都市つながり?

S：それもあつけど。例えば、東京という中心に向かわず、外から「東京」をテーマにできそうかなあって。

m：じゃあ、同じアジア圏でオリンピックをやった首都ってことで北京も良いですか?

S：さらに北京が入るのは面白いかな。では、もうひとつロンドンも。

m：あー!そこは重要な広がりがある。当然、1964年の東京オリンピックも含まれるから東京も入るもんね。じゃあ思い切って環太平洋的にもうひとつ越えてい……ロス!

S：うんね。東京1964年、ロス1984年、ソウル1988年、シドニー2000年、北京2008年、で次回オリンピックは2020年、2018年基準でいうと、北京が10年前、シドニーは18年前、ソウルが30年前、ロスが34年前、東京は64年前。有名な話では、ソウルオリンピックの時大食いする店が結構無くなったって聞いたことがあるけど、オリンピックの意味の変化と同時にその周囲で消えて行く文化も見えるかもね。まず、1年目の宮本常一が消え行く長良を盛んに蒐集していた時期で1960年代前後のこと、今回の東京オリンピックの前です。だからその儼らという時期なわけ。

m：うん、すでに変化目に見えて来ている。このプランがTRラボ4年目のプランにして現実味あるかどうかは別として、こういう場所に対する直感や興味はすごく重要だし、あくまでも

S：もうひとつの実験としては、可能な限りの動画を残しておくこと。演劇の記録をしているノロ(加藤和也)がリサーチアシタエイとしてそのことを担当した。彼は機能もサイズも違う何台もの小さなビデオカメラを駆使して記録しきっていた。

m：インタビューとか、いかにもという場面だけじゃなくてチーム内の他愛も無いやりとりも。ただ動画の記録に関していうと、振り返る時に1年の1の時間の必要で、全部をメンバー全員で記録するのはほぼ不可能。撮っている本人はスイッチを入れたり切り替えているから、何かが録音、記憶に書き込まれているかもしれないんだけど、他のメンバー、記録されている方は、ほとんど無意識のままだから撮られているのかあままりわからない。その点、行動記録は全て入って付けていった日記は、チーム内での動きをメンバー全員で共有する1つの試みでもあったと思うんだ。

S：そうそう。一日の出来事をビデオで全回しても絶対に見ない。でもそれぞれメンバーの中で編集されて蓄積されてその日のことを、その日のうちに思い出して、ちょっと言葉にしてみたり、日記に書き起してみる。ひとつのタイムライン上に皆が書き起こした断片的な日記がめっさり、複雑な絡み合って、これってまだ表現にはなってなくて人に見せるほどではないんだけど、挑戦する方向としては間違っていない気はした。

m：簡単にパッとひとつの視界で一日の動きと気付きとかが確認できることで、書き込まれていることとの関連も見えてきたよね。あと、Aさんをインタビューした時にこういう発言があったと誰かが書き込んだ、別の時に資料館でみかけた解説文の誰かの発言が反応して書き込んだり、その2つの関連性をまた別の誰かが気づいて矢印を引く。グループでの考察が紡ばれ出す。こうなってくると描かれたものはスケジュール表とコメントを越えてマインドマップみたいな、グループでのマインドがどう動いていたのかっていうことが記録されていた。これはフィールドノートに近いよね。しかもグループ型。見た感じはカオスだし、枚数が多く増えてきて、全貌を見ることも完全に細くするのは難しいけど、やれなは(はなっていく)…

S：車内の風景とか、やっつことをでできるだけ全部映像に撮らうというのは重要だった。でも、映像自体を全部見返すってことはやっぱないだね。

m：今度にならないよね。だから映像は未発表。だけどリサーチを記録した「全員日記」は最終的な成果物の一部にしたんだよね。

—————
**【リサーチを、どう記述するか? -2年目の話】 ※参考資料B、※参考資料C**

S：じゃ、2年目はどうだったか、という話をするよ。「車で旅する」のは一緒だった。ただ、この1年目の「全員日記」のような残し方が「音声」に変化する。旅の中でmamoruと俺が話した事になって、その日何があったか、その日何のうちに車をスタジオにしてPodcastを一本録音したことになった。寝たいよねっていうか、メンバーの皆にもアイデアをもらい一つ、一日を振り返りながら話すトピックの流れを構成したし上で、その日発見とかその日の気になったことを二人で会話する。1年目の全員日記に戻るとはまためつても、話しながら生まれて来るものももちろんあります。さらにそれを旅中に葉集りYouTubeにあけてみる。つまり、聞く人を意識して作ってた。そんな中で、車で走ってる時にもいつか車を停車させて動くい臨場感込みで録ってたようにとか、コーナでコーナでやってみようとか、車外に出て周囲の音も録音してみようとか、ジャンルを作ってみようとか、とどんどん臨場的にできている、やりながら日々どんどん面白くなっていった。後から聞き直すことになり内輪感ってやつで、恥ずかしい限りなんだけど、あいう風風に「グループ型のフィールドノート」が音になっっていたっていうのは2年目の面白さどころだったよね。

m：モチベーションとしては「全員日記」が印刷された状態、周囲の反応を目の当たりにして、面白がって聞かれるものもできなくていいっていうことがあったと思う。特に2年目のリサーチトピックのひとつだった幕末・明治の探検家・松浦武四郎が旅の果てに辿り着いた「墓ながらの旅」というのが頃のことかあって、リサーチに同行していないリスナーが聞いた時に、リサーチ車中にも自分も乗り合わせているような感覚が少しでも生み出せたらすごいいいねという話していた。

S：1年目は違ってた音を人にちゃんと伝えるという感覚をより強めていたっていうのは本当にその通りだね。音にシフトしたのはmamoruが音の人だから当然と言えは当然で、僕としては本能的に新しく学ぶことが多かった。音の支配力というか。あとは、1年目に大阪で取材した映像人類学者の川瀬さんがインタビューの後にたまたまTRラボの移動車に同乗することになって、その車中が結構面白かったから、2年目もそういう面白い人に同乗してもらって、一緒に乗ることもできてきたらいいよねっていうので、詩人の菅野浩太郎さんにお話をし、23日3日の旅を行程に組み込んだ。札幌で合流して移動車に同乗してもらって、旅をしながら何度かPodcastも録りながら、最終的に羅臼まで一緒に行った。2日間で生まれたPodcastも相当濃縮だったし、いろいろな大切な物を記録されている。

m：そうそう。2年目の旅行にはインタビューしたい人に乗せる「ゲストシート」を設けた、と同時Podcastを旅中に配信し続けたこととリスナーも同乗して気分を味わってもらえるように架空の「リスナーシート」みたいなものも作るうとしていたのかもかもしれない。

S：Podcastを充実させようとして、コーナーみたいなのも結構作ったよね。車中で録音している最中に1年目にインタビューされた映像人類学者の川瀬さんに電話を繋いで「初めての旅」というコーナーで話してもらい録音した。車内のスピーカーで全て聞かせるのが話しながら、イラストを描き込んだり。

—————

のビジュアル的な答えかもしれない。グループワークとして、最後にひとつの作品を作りましようってことが最終目標だった場合、そのグループ内でのどのような化学反応が起こったかっていう過程の部分っていうのは最後要らなくなってしまう。通ってしまえば記録されず最後の目的地だけを見ている感じ。今回は、過程をインに記録すること、さらにそこを発表する意図、というまづ段階は無いところを覚えてやってみた。

m：確かに。グループリサーチのログのとり方でもわりと早く簡単に、同時多発的に発生しているグループ内での地点の変遷をメンバー間でコミュニケーションせずに、無意識のままに記録してしまおうみたいな点は発見されたね。少し気になるのは、今回の旅中、毎晩ご飯食べている最で全員の手振かその日の画像データとTRラボの共有ハードディスクに差し込んでいた。でも数が膨大だったせいかそれを見せ合うことはしなかった。大変だと思うけど、毎晩全員がクエポイントを確認し合ったりするとお互いにリサーチにもっと影響を受けあったのかな?例えば一晩に画像を見せ合った場合に、他の人の撮ったものに比べて聞かせるのが話しながらとかってかつ興味関心の方向がずれるようなこととか。

S：うーん、何かが起こる可能性はたははないけど、写真だけをお互い見せ合っても面白い反応が起きたかどうか。逆に、写真は記録しないし発見や感動を写真と一体化させるのはやはり言葉が生きてたかな。だからライブを報告会からのフィールドバックは実際少なかった。だからこそ思い立った時のPodcast的な会話だったんじゃない?

m：なるほど。旅の中でフィードバックを起すメディアが試みには会話も有効、全記録はあくまでもログとして優れているっていうことなのかもね。

S：そう言えば、もともと1年目にもTARLが試みているデジタルアーカイブの方法を試してみたいっていう提案自体はあったよね。

S：その時は、全員で写真を振り残すことに抵抗感を覚えた。全員がカメラに集中してしまっ旅のフラーが変わってしまうんじゃないか、と思った。それに、1年目は色々としたことが山のようになって、正直そういう提案を起し入れられる余地が無かったし、2年目も自分達で課したタスク以外の余白は無かった。それで2週間程度で数千キロを移動しているから時間的にも体力的にもギリギリ。だから今回の小笠原では移動するエリアを狭めたか、いろいろな余裕が作れて、TRラボとしてどこぼしめたい色々なことを取り入れたのかなっていう気はするんじゃないけど。森さんの提案を元にして、はみ出してスクショや資料画像を入れて、やっぱり動画も良いな、となってメンバーの一人がほとんどずっとiPhone7で4k映像を撮っていた。これでもってどう経緯だったか、自分達の研究や方法を広げ直す意味では重要な話気がする。

S：うん。そこから11枚のポストカードセットが生まれて来た。表面の写真画像と裏面の短い文章が合わせて発見や想像の連鎖が少し共有できるというに心がけた。これは、旅中の発見だと、次どこどこに行かなきゃいけないんであと2時間しかありません。ど強制的に終わる必要があったりする。じゃあ、その間にパッとやっちゃおう、となる。夕食を囲んだ場合っていうのはなんと今でも最後までズラズラする。これをポキャプラリーとして書いたら移動車ポラの条件としてラジアンという人が話すというひとつのギアだった。夕食を囲んでいこうだったり、外を歩きながら駆るっていうギアとかを意識すればタイムフレームのバラエティが意図的に作り出せるのかもしれない。

—————
**【4年目の始まり、の話】**

S：おそろく4年目の大きなテーマとしてはTRラボをどうするか。3年間の実験を経て、まとめあげること。まだまだ実験的に進ませながら自立した表現として世の中に出してやるのか。キーワードとしては、「東京」、そして時期的に踏み込むと「オリンピック」。このキーワード意識を表に出さない場合はあそこ、背後で考えながら決めないかな。ただ「東京」と言っても、そのまま文字通り「東京でリサーチなのか…」、そこをひっくり返して置き換えて……例えば「ソウルで東京を考えると!」とか?

m：ほ!オリンピック開催都市つながり?

S：それもあつけど。例えば、東京という中心に向かわず、外から「東京」をテーマにできそうかなあって。

m：じゃあ、同じアジア圏でオリンピックをやった首都ってことで北京も良いですか?

S：さらに北京が入るのは面白いかな。では、もうひとつロンドンも。

m：あー!そこは重要な広がりがある。当然、1964年の東京オリンピックも含まれるから東京も入るもんね。じゃあ思い切って環太平洋的にもうひとつ越えてい……ロス!

い、なかなか良かったよね、あれ。

m：Podcastは録音されて、編集されて、配信されるわけだから最終的に固定されたコンテンツになる。だけど自身は会話でも進んでいくから構成はあるけど台本通りではないこともあって、かなり編集されても、2人が会話しながら何かを探っていく期間、その場で生れる軌跡をそのまま定義させるメディアとして改めて使えるな、と感じた。で、それよりリサーチの性質と合う。リサーチの時の心境や状況によって、何かを調べている状況だったりするわけじゃない。おそろくリサーチ中に結論みたいな答えも出て降りてきて、それを論議するみたいなことには即ならない。後から振り返って気づいて、まとめていて、脈絡を作って、繋げ結論にする。アーティストの場合は作品になる。もうこうだって思うんだけど、このTRラボで面白いのは、歯ぶらひのままだという、結論が全然出てないんだけどすでに何か面白いっていうフェーズ、そもそもライブ性の高いリサーチを生きたり段階からシェアする。なんか公開して他の人もアクセスができる状況にして、そんなことにはすごく良いメディアになって思ったな。

S：うん、その「生々しさをシェアする」っていう言葉を今聞いて、そして写真とかに置き換えることと、「発見や感動の手応えが伝播する」みたいなものだと思うんだね。何となく「お美しい!」と思って写真を写した時に、写真にその美しいと思った気持ちが映る。その生々しさとか手応えとかその瞬間の何かはちょっと定義してたりして、それって意外と2年目のPodcastの成功している部分かと思うのね。

あとPodcastやラジオを表現としてアーティストが作るって前例はたくさんあるんだけど、グループでフィールドワークとして今回のフィールドノートを1枚の紙に全員で書き記している感覚のPodcastっていうのがTRラボらさまで、それを今から誰でもできるかっていうことができると、2年目にこれだけ集申してやってるから俺らはいつでもできるようにってるね。

m：3年目の話になっちゃうけど、小笠原でのリサーチ旅の間もグループで振り返るというモードに入った時に「じゃあ試しに一回、Podcastみたいに録ろう」って言葉が出た。あれはまさに「フィールドノートの全員同時録音」だね。こうして今日みたいにリサーチも報告会ライブも録って1週間後しようというかつ時にメンバーがそれぞれ振り返りテキストを1ラテで書いていうことはあんまりリアリティがなくなっている。だからこんな風に会話的に付き合わせて、そこで語れることがTRラボとして、面白いはずかと。まあ読む人がもうちょいまとめてくれて今読みながら言ってるかもしれないけど(笑)。

—————
**【新しい報告会 -ライブはライブで-再び1年目】**

S：1年目の全員日記から2年目のPodcastへ。「グループ型のフィールドノート」について話しましたが。これって報告書というか記録の話だね。でも報告会という「ライブ」がTRラボの中のもうひとつの柱。そして報告会と報告書の二つは絡み合っていて、ライブとその記録という区分けはない。重要だったのは、1年目の東京に始まり(前の車中)、旅が始まった後に普通にこんな旅をしたって報告会をしてそれを記録して紙(報告書)にしても仕方ないなあ、という意識がまずあった。面白いインタビューは取っていくけど、インタビュー本にするのもってと丁寧な時間が必要だし、自分達が得たものや蓄積されたものを上手く編集してアウトプットする別の方法をしてみたいとも思った。それで報告会を作り定型なレポート形式じゃなくて、何かしら「ライブ」のようなものにしようとした。さらにTRラボのもうひとつの柱でもある報告書というか印刷物はライブを報告するモノではなく(再現可能な台本という形式にしよう、と)

m：旅の中を駆け回らிட்டったかなあ、移動車がラボなんだっていう自覚が生まれてきた。何か報告する価値があるとしたら移動車の中に湧いてくるリサーチの「空気」があるんじゃないか、と思った。それをなんか持ち込むにはライビ性の強い報告会が良んじゃないかと。となった。言葉で伝えるだけじゃなくて、来た人達がTRラボの移動車空間に同乗した気になれるライブを作ろう。

S：ああ面白い話だね。どうでも良い話ですけど、車のシート間の座り方もあえて作ろうに決まってきたいて、編集マインドというか実験として、その日の席間の記録や席を空けて席替するという提案があったり。そういうことが報告会ライブの時の座る順番に反映されたり。

m：それで、実際に話ったことでは時系列でリサーチを振り返るんではなく、個別に面白いエピソードも色々あったけど、あえて全行程を通じて自分達が得たものをトピックにまとめた。「リサーチと収束法」、「おれと作旅」、「アウトプットと表現」。このつを軸にして台本を作って、編集されたトークをやった。

—————
**【ライブを、どう記述するか?】**

S：そしてこのトークを書き起こしたものを元にして報告書を作った。もちろん、内容を補足したり、文章の整型整頓は行ったんだけど、ここはライブで生まれたことを活かしつつ、終わるとで再現可能なテキストを目指した。

m：上演台本みたいなものかもね。この時点で言語化されなかったかもしれないけど、このライブ性のあるものを印刷物のようなメディアに定義させる経緯から得た体的なもの、言ってみれば記述の仕方じゃなかったか、と思う。記録しながら同時に発言してっているうのかな。この間性っていうのがなくってTRラボの活動の中では歳になつてくる気分。今もこうして、後々テキストを作ることを考えながら、Skype越しに会話をして、録音してっていうのは、記録しながら発言しながら思考を進め、記述しているんだと思う。

—————

ブレンストーミングの段階なので、仮に「環太平洋オリンピック開催都市ツアーをする」としてみようとか。

S：仮、仮にね。まずは企画はデカくね(笑)。

m：どういう場所に行くにせよ、3年間かけてリサーチ旅、報告会ライブ、印刷物を作るっていう要素はあった。では別め別めだったのが、ひとつのタイムフレームの中を自分で自由に合わせるように決めた。結構至難の技だけど、この時間をもう一回面白い形、興味を持ってフォローしてくれる人達も一緒に体験する方法を作ると面白いだろうね。

S：旅に出る前からライブのチケットを買ってもらったり、メンバー登録とかしてもらったりして、旅中にメルマガみたいなのが届くとか?一日一枚写真と音が届くとか?そんなことも報告会への導入と一体感を生み出せるかもしれない。今回すでに、ライブのDMが印刷物の前振りにもなっていたし、リサーチ段階で行なっていた記録は、ライブの骨格のひとつを生み出していた。何か色々新しい感覚というものを身体的に